

早稲田大学ドイツ語学・文学会
第7回研究発表会研究発表要旨
(1999年9月18日)

Wiederholung — Thomas Bernhard と Peter Handke の場合

高 橋 久美子

戯曲作品を構成する要素としての「反復(Wiederholung)」について、トーマス・ベルンハルトとペーター・ハントケの場合に注目した考察を行った。その作品において両作家は共に、「反復」の要素に非常に重要な位置付けを与え、且つ非常に目立つ形でこれを用いている。だが、このような共通項が見出される反面、両者における「反復」の示す方向性は際立って異なる。今回この二作家を並べて取り上げたのはこうした理由による。

ベルンハルトの作品において、「反復」は、登場人物の心理状態を表す、作品の基調を成す、作品にリズムを与える等の機能をもつ。曾ては具体的な意味をもって語られていた言葉が無為に繰り返されるとき、その人物の時間はその「曾て」へと一瞬のうちに戻り、現実はその都度無視され、「曾て」から現時点までの現実の経験は蓄積されることがなくなる。反復される言葉が作品の基調を成している例として、『習慣の力』が挙げられる。テキストから „Augsburg“ という地名を含む台詞のデータをとってみると、この言葉の反復が、物語の流れを映す、或いは導くものであることが明らかである。ベルンハルトの戯曲作品は、結末がそのまま同じような物語の始まりである、という印象を与えて終わることが多い。つまり、一個の物語全体までもが「反復」の主体であり得る。

ハントケにおいては、手段としての「反復」と目的としての「反復」の二つがある。前者とは、既知の事柄を織り交ぜた(すなわち何らかの事柄の反復を含む)出来事を提示することによって、観る者に回想を喚起するもの、そして後者とは、回想によって観る者の内で生じる個々の出来事の群れ、ハントケの文脈における「現在の神話」を成すものである。個々の出来事には、登場人物、時、所等が全く同じ組み合わせで構成されるものは決して無く、従って同じ出来事は二つは無い。それは、一つ限りであること、そしてまた回想の中でその都度新たに生じること、によって永遠性を獲得し、その在り方は絶対的なものとなる。ハントケが「反復」と言うとき、そこにはこのような内容をもつ「現在の神話」が常にある。

二作家における「反復」の要素を比較するならば、それはベルンハルトにおいては「封じ込めるもの」、ハントケにおいては「解き放つもの」と表現できるかも知れない。すなわち、自己に行き着くことなく延々とその周囲を巡り続ける人の、或いは物語の姿を表すもの、そして、一個の人を超えた根源的なものを指向するものである。だが、一方では、ベルンハルトの「反復」は、こうした封じ込めによってかえって観る者に舞台との距離、第三者としての自由を与え、ハントケの「反復」は観る者に同じ過程を体験することを求める。「解き放ち」の実現は、従って相対である。